日本短篇文学全集 14

篇文学全集14

漱石
寅彦
三重吉
百閒

責任編集　臼井吉見

筑摩書房

日本短篇文学全集　第14巻

昭和43年12月5日第一刷発行

著者　夏目漱石
　　寺田寅彦
　　鈴木三重吉
　　内田百閒

発行者　竹之内静雄

発行所　筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
郵便番号　101—91
電話　東京(291)7651
振替　東京4123
製版・明和印刷
印刷・多田印刷
製本・鈴木製本

定価　360円

目次

夏目漱石
倫敦塔……三
文鳥……二四
夢十夜……三九
クレイグ先生……六二
ケーベル先生……七〇

寺田寅彦
団栗……七七

亮の追憶……八三
自画像……九七
糸車……一二〇

鈴木三重吉

千鳥……一二九
山彦……一五九
黒髪……一八九

内田百閒

花火……一九九
豹……二〇三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

旅順入城式……二〇七
鯉……二一〇
流渦……二一四
サラサーテの盤……二一七
南蠻鴃舌……二二二
棗の木……二四三
鑑賞（青柳瑞穂）……二六三

装幀　栃折久美子

夏目漱石

夏目漱石（一八六七―一九一六）

慶応三年一月五日（陽暦二月九日）江戸牛込馬場下横町（現新宿区牛込喜久井町）に生れた。一高時代正岡子規と知る。帝国大学文科大学英文科を出て、松山中、熊本の五高に教鞭をとり、明治三十三―五年イギリスに留学した。明治三十八年「吾輩は猫である」を発表、たちまち文名挙る。「倫敦塔」は「猫」と同時に発表された。「坊ちゃん」（明治三十九年）「草枕」（明治四十年）「門」（明治四十三年）「行人」（大正二年）「こゝろ」（大正三年）「道草」（大正四年）「明暗」（大正五年）等の長篇代表作は近代文学史の第一の遺産であるが、ここに収録した短篇の他、小品・随筆にも、深い味わいが籠められている。大正五年十二月九日五十歳にて急逝。本集に同時に収めた寺田寅彦・鈴木三重吉・内田百閒は漱石に深い影響を受けた門人たちである。

倫敦塔

二年の留学中只一度倫敦塔を見物した事がある。その後再び行こうと思った日もあるが止めにした。人から誘われた事もあるが断った。一度で得た記憶を二返目に打壊わすのは惜しい、三たび目に拭い去るのは尤も残念だ。「塔」の見物は一度に限ると思う。

行ったのは着後間もないうちの事である。その頃は方角もよく分らんし、地理などはもとより知らん。まるで御殿場の兎が急に日本橋の真中へ抛り出された様な心持ちであった。表へ出れば人の波にさらわれるかと思い、家に帰れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑い、朝夕安き心はなかった。この響き、この群集の中に二年住んで居たら吾が神経の繊維も遂には鍋の中の麩海苔の如くべとべとになるだろうとマクス・ノルダウの退化論を今更の如く大真理と思う折さえあった。

しかも余は他の日本人の如く紹介状を持って世話になりに行く宛もなく、また在留の旧知とてはむろんない身の上であるから、恐々ながら一枚の地図を案内として毎日見物のためもしくは用達のため出あるかねばならなかった。むろん汽車へは乗らない、馬車へも乗れない、滅多な交通機関を利用仕様とすると、どこへ連れて行かれるか分らない。この広い倫敦を蜘蛛手十字に往来する汽車も馬車も電気鉄道も鋼条鉄道も余には何等の便宜をも与える事が出来なかった。余は已を得ないから四ツ角へ出るたびに地図を披いて通行人に押し返されながら足の向く方角を定める。地図で知れぬ時は人に聞く、人に聞いて知れぬ時は巡査を探す、巡査でゆかぬ時はまたほ

かの人に尋ねる、何人でも合点の行く人に出逢うまでは捕えては聞き呼び掛けては聞く。かくしてようやくわが指定の地に至るのである。

「塔」を見物したのはあたかもこの方法に依らねば外出の出来ぬ時代の事と思う。きたるに来所なく去るに去所を知らずと云うと禅語めくが、余はどの路を通って「塔」に着したかまたいかなる町を横ぎって吾家に帰ったかいまだに判然しない。どう考えても思い出せぬ。只「塔」を見物しただけは慥かである。「塔」その物の光景は今でもありありと眼に浮べる事が出来る。前はと問われると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。只前を忘れ後を失したる中間が会釈もなく明るい。あたかも闇を裂く稲妻の眉に落つると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の焼点の様だ。

倫敦塔の歴史は英国の歴史を煎じ詰めたものである。過去と云う怪しき物を蔽える戸帳がおのずと裂けて龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。すべてを葬る時の流れが逆しまに戻って古代の一片が現代に漂い来れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬、車、汽車の中に取り残されたるは倫敦塔である。

この倫敦塔を塔橋の上からテームス河を隔てて眼の前に望んだとき、余は今の人か将た古えの人かと思うまで我を忘れて余念もなく眺め入った。冬の初めとはいいながら物静かな日である。空は灰汁桶を掻き交ぜた様な色をして低く塔の上に垂れ懸って居る。壁土を溶し込んだ様に見ゆるテームスの流れは波も立てず音もせず無理矢理に動いて居るかと思わるる。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆をあやつるのだから不規則な三角形の白き翼がいつまでも同じ所に停って居る様である。伝馬の大きいのが二艘上って来る。只一人の船頭が艫に立って艪を漕ぐ、これもほとんど動かない。塔橋の欄干のあた

りには白き影がちらちらする、大方鷗であろう。見渡した処すべての物が静かである、物憂げに見える、眠って居る、皆過去の感じである。そうしてその中に冷然と二十世紀を軽蔑する様に立って居るのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、いやしくも歴史の有らん限りは我のみは斯くてあるべしと云わぬばかりに立って居る。その偉大なるには今更の様に驚かれた。この建築を俗に塔と称えて居るが塔と云うは単に名前のみで実は幾多の櫓から成り立つ大きな地城である。並び聳ゆる櫓には丸きもの角張りたるもの色々の形状はあるが、いずれも陰気な灰色をして前世紀の紀念を永劫に伝えんと誓える如く見える。九段の遊就館を石で造って二三十並べてそうしてそれを虫眼鏡で覗いたらあるいはこの「塔」に似たものは出来上りはしまいかと考えた。余はまだ眺めて居る。セピヤ色の水分を以て飽和したる空気の中にぼんやり立って眺めて居る。二十世紀の倫敦がわが心の裏から次第に消え去ると同時に眼前の塔影が幻の如き過去の歴史を吾が脳裏に描き出して来る。朝起きて啜る渋茶に立つ煙りの寐足らぬ夢の尾を曳く様に感ぜらるる。暫くすると向う岸から長い手を出して余を引張るかと怪しまれて来た。今まで佇立して身動きもしなかった余は急に川を渡って塔に行きたくなった。長い手はなおなお強く余を引く。余はたちまち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐいぐい牽く。塔橋を渡ってからは一目散に塔門まで馳せ着けた。見る間に三万坪にあまる過去の一大磁石は現世に浮游するこの小鉄屑を吸収し了った。門を入って振り返ったとき、

憂の国に行かんとするものはこの門を潜れ。
永劫の呵責に遭わんとするものはこの門をくぐれ。
迷惑の人と伍せんとするものはこの門をくぐれ。
正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

初愛は、われを作る。
我が前に物なし只無窮あり我は無窮に忍ぶものなり。

この門を過ぎんとするものは一切の望を捨てよ。

という句がどこぞに刻んではないかと思った。余はこの時すでに常態を失って居る。

空濠にかけてある石橋を渡って行くと向うに一つの塔がある。これは丸形の石造で石油タンクの状をなしてあたかも巨人の門柱の如く左右に屹立して居る。その中間を連ねて居る建物の下を潜って向へ抜ける。中塔とはこの事である。少し行くと左手に鐘塔が峙つ。真鉄の盾、黒鉄の甲が野を蔽う秋の陽炎の如く見えて敵遠くより寄すると知れば塔上の鐘を鳴らす。星黒き夜、壁上を歩む哨兵の隙を見て、逃れ出ずる囚人の、逆しまに落す松明の影より闇に消ゆるときも塔上の鐘を鳴らす。心傲れる市民の、君の政非なりとて蟻の如く塔下に押し寄せて犇めき騒ぐときもまた塔上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。ある時は無二に鳴らし、ある時は無三に鳴らす。祖来る時は祖を殺しても鳴らし、仏来る時は仏を殺しても鳴らした。霜の朝、雪の夕、雨の日、風の夜を何遍となく鳴らした鐘は今いずこへ行ったものやら、余が頭をあげて蔦に古りたる櫓を見上げたときは寂然としてすでに百年の響を収めて居る。

また少し行くと右手に逆賊門がある。門の上には聖タマス塔が聳えて居る。逆賊門とは名前からがすでに恐ろしい。古来から塔中に生きながら葬られた幾千の罪人は皆舟からこの門まで護送されたのである。彼等が舟を捨てて一度びこの門を通過するや否や娑婆の太陽は再び彼等を照らさなかった。テームスは彼等にとっての三途の川でこの門は冥府に通ずる入口であった。彼等は涙の浪に揺られてこの洞窟の如く薄暗きアーチの下まで漕ぎ付けられる。口

を開けて鰯を吸う鯨の待ち構えて居る所まで来るや否やキーと軋る音と共に厚樫の扉は彼等と浮世の光りとを長えに隔てる。彼等はかくして遂に宿命の鬼の餌食となる。明日食われるか明後日食われるかあるいはまた十年の後に食われるか鬼より外に知るものはない。この門に横付につく舟の中に坐して居る罪人の途中の心はどんなであったろう。櫂がしわる時、雫が舟縁に滴たる時、漕ぐ人の手の動く時ごとに吾が命を刻まるる様に思ったであろう。白き髯を胸まで垂れて寛やかに黒の法衣を纏える人がよろめきながら舟から上る。これは大僧正クランマーである。青き頭巾を眉深に被り空色の絹の下に鎖り帷子をつけた立派な男はワイアットであろう。これは会釈もなく舷から飛び上る。はなやかな鳥の毛を帽にさして黄金作りの太刀の柄に左の手を懸け、銀の留め金にて飾れる靴の爪先を、軽げに石段の上に移すのはローリーか。余は暗きアーチの下を覗いて、向う側には石段を洗う波の光の見えはせぬかと首を延ばした。水はない。逆賊門とテームス河とは堤防工事の竣功以来まったく縁がなくなった。幾多の罪人を呑み、幾多の護送船を吐き出した逆賊門は昔しの名残りにその裾を洗う笹波の音を聞く便りを失った。只向う側に存する血塔の壁上に大なる鉄環が下がって居るのみだ。昔しは舟の纜をこの環に繋いだという。

左りへ折れて血塔の門に入る。今は昔し薔薇の乱に目に余る多くの人を幽閉したのはこの塔である。草の如く人を薙ぎ、鶏の如く人を潰し、乾鮭の如く屍を積んだのはこの塔である。血塔と名をつけたのも無理はない。アーチの下に交番の様な箱があって、そのかたわらに甲形の帽子をつけた兵隊が銃を突いて立って居る。すこぶる真面目な顔をして居るが、早く当番を済まして、例の酒舗で一杯傾けて、一件にからかって遊びたいという人相である。塔の

壁は不規則な石を畳み上げて厚く造ってあるから表面は決して滑ではない。所々に蔦がからんで居る。高い所に窓が見える、建物の大きい所為か下から見るとはなはだ小さい。鉄の格子がはまって居る様だ。番兵が石像の如く突立ちながら腹の中で情婦と巫山戯て居るかたわらに、余は眉を攢め手をかざしてこの高窓を見上げて佇ずむ。格子を洩れて古代の色硝子に微かなる日影がさし込んできらきらと反射する。やがて煙の如き幕が開いて空想の舞台がありありと見える。窓の内側は厚き戸帳が垂れて昼もほの暗い。窓に対する壁は漆喰も塗らぬ丸裸の石で隣りの室とは世界滅却の日に至るまで動かぬ仕切りが設けられて居る。只その真中の六畳ばかりの場所は冴えぬ色のタペストリで蔽われて居る。地は納戸色、模様は薄き黄で、裸体の女神の像と、像の周囲に一面に染め抜いた唐草である。石壁の横には、大きな寝台が横わる。厚樫の心も透れと深く刻みつけたる葡萄と、葡萄の蔓と葡萄の葉が手足の触るる場所だけ光りを射返す。この寝台の端に二人の小児が見えて来た。一人は十三四、一人は十歳位と思われる。幼なき方は床に腰をかけて、寝台の柱に半ば身を倚たせ、力なき両足をぶらりと下げて居る。右の肱を、傾けたる顔と共に前に出して年嵩なる人の肩に懸ける。年上なるは幼なき人の膝の上に金にて飾れる大きな書物を開げて、そのあけてある頁の上に右の手を置く。象牙を揉んで柔かにしたる如く美しい手である。二人とも烏の翼を欺くほどの黒き上衣を着て居るが色がきわめて白いので一段と目立つ。髪の色、眼の色、さては眉根鼻付から衣装の末に至るまで両人共ほとんど同じ様に見えるのは兄弟だからであろう。

兄が優しく清らかな声で膝の上なる書物を読む。

「我が眼の前に、わが死ぬべき折の様を想い見る人こそ幸あれ。日ごと夜ごとに死なんと願え。やがては神の前に行くなる吾の何を恐るる……」

弟は世に憐れなる声にて「アーメン」と云う。折から遠くより吹く木枯しの高き塔を撼がして一度びは壁も落つるばかりにゴーと鳴る。弟はひたと身を寄せて兄の肩に顔をすり付ける。雪の如く白い蒲団の一部がほかと膨れ返る。兄はまた読み初める。

「朝ならば夜の前に死ぬと思え。夜ならば翌日ありと頼むな。覚悟をこそ尊べ。見苦しき死に様ぞ恥の極みなる……」

弟また「アーメン」と云う。その声は顫えて居る。兄は静かに書をふせて、かの小さき窓の方へ歩みよりて外の面を見ようとする。窓が高くて脊が足りぬ。床几を持って来てその上につまだつ。百里をつつむ黒霧の奥にぼんやりと冬の日が写る。屠れる犬の生血にて染め抜いた様である。兄は「今日もまたこうして暮れるのか」と弟を顧みる。弟は只「寒い」と答える。「命さえ助けてくるるなら伯父様に王の位を進ぜるものを」と兄が独り言のようにつぶやく。

弟は「母様に逢いたい」とのみ云う。この時向うに掛って居るタペストリに織り出してある女神の裸体像が風もないのに二三度ふわりふわりと動く。

忽然舞台が廻る。見ると塔門の前に一人の女が黒い喪服を着て悄然として立って居る。面影は青白く窶れては居るが、どことなく品格のよい気高い婦人である。やがて錠のきしる音がしてぎいと扉が開くと内から一人の男が出て来て恭しく婦人の前に礼をする。

「逢う事を許されてか」と女が問う。

「否」と気の毒そうに男が答える。「逢わせまつらんと思えど、公けの掟なれば是非なしと諦め給え。私の情売るは安き間の事にてあれど」と急に口を緘みてあたりを見渡す。濠の内からかいつぶりがひょいと浮き上る。

女は頸に懸けたる金の鎖を解いて男に与えて「只束の間を垣間見んとの願なり。女人の頼み引き受け

ぬ君はつれなし」と云う。

男は鎖りを指の先に巻きつけて思案の体である。かいつぶりはふいと沈む。ややありていう「牢守りは牢の掟を破りがたし。御子等は変る事なく、すこやかに月日を過させ給う。心安く覚して帰り給え」と金の鎖りを押戻す。女は身動きもせぬ。鎖ばかりは敷石の上に落ちて鏘然と鳴る。

「いかにしても逢う事は叶わずや」と女が尋ねる。

「御気の毒なれど」と牢守が云い放つ。

「黒き塔の影、堅き塔の壁、寒き塔の人」と云いながら女はさめざめと泣く。

舞台がまた変る。

丈の高い黒装束の影が一つ中庭の隅にあらわれる。苔寒き石壁の中からスーと抜け出た様に思われた。夜と霧との境に立って朦朧とあたりを見廻す。暫くすると同じ黒装束の影がまた一つ陰の底から湧いて出る。櫓の角に高くかかる星影を仰いで「日は暮れた」と脊の高いのが云う。「昼の世界に顔は出せぬ」と一人が答える。「人殺しも多くしたが今日ほど寐覚の悪い事はまたとあるまい」と高き影が低い方を向く。「タペストリの裏で二人の話しを立ち聞きした時は、いっその事止めて帰ろうかと思うた」と低いのが正直に云う。「絞める時、花の様な唇がぴりぴりと顫うた」「透き通る様な額に紫色の筋が出た」「あの唸った声がまだ耳に付いて居る」。黒い影が再び黒い夜の中に吸い込まれる時櫓の上で時計の音ががあんと鳴る。

空想は時計の音と共に破れる。石像の如く立って居た番兵は銃を肩にしてコトリコトリと敷石の上を歩いて居る。あるきながら一件と手を組んで散歩する時を夢みて居る。

血塔の下を抜けて向へ出ると奇麗な広場がある。その真中が少し高い。その高い所に白塔がある。白塔は塔中のもっとも古きもので昔しの天主である。

竪二十間、横十八間、高さ十五間、壁の厚さ一丈五尺、四方に角楼が聳えて所々にはノーマン時代の銃眼さえ見える。千三百九十九年国民が三十三カ条の非を挙げてリチャード二世に譲位をせまったのはこの塔中である。僧侶、貴族、武士、法士の前に立って彼が天下に向って譲位を宣告したのはこの塔中である。その時譲りを受けたるヘンリーは起って十字を額と胸に画して云う「父と子と聖霊の名によって、我れヘンリーはこの大英国の王冠と御代とを、わが正しき血、恵みある神、親愛なる友の援を藉りて襲ぎ受く」と。さて先王の運命は何人も知る者がなかった。その死骸がポント・フラクト城より移されて聖ポール寺に着した時、二万の群集は彼の屍を繞ってその骨立せる面影に驚かされた。或は云う、八人の刺客がリチャードを取り巻いた時彼は一人の手より斧を奪いて一人を斬り二人を倒した。去れどもエクストンが背後より下せる一撃のために遂に恨を呑んで死なれたと。或る者は天を仰いで云う「あらずあらず。リチャードは断食をして自らと、命の根をたたれたのじゃ」と。いずれにしても難有くない。帝王の歴史は悲惨の歴史である。

階下の一室は昔しオルター・ロリーが幽囚の際万国史の草を記した所だと云い伝えられて居る。彼がエリザ式の半ズボンに絹の靴下を膝頭で結んだ右足を左の上へ乗せて鷲ペンの先を紙の上へ突いたまま首を少し傾けて考えて居る所を想像して見た。しかしその部屋は見る事が出来なかった。

南側から入って螺旋状の階段を上るとここに有名な武器陳列場がある。時々手を入れるものと見えて皆ぴかぴか光って居る。日本に居ったとき歴史や小説で御目にかかるだけで一向要領を得なかったものが一々明瞭になるのははなはだ嬉しい。しかし嬉しいのは一時の事で今では丸で忘れてしまったからやはり同じ事だ。只なお記憶に残って居るのが甲冑で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo